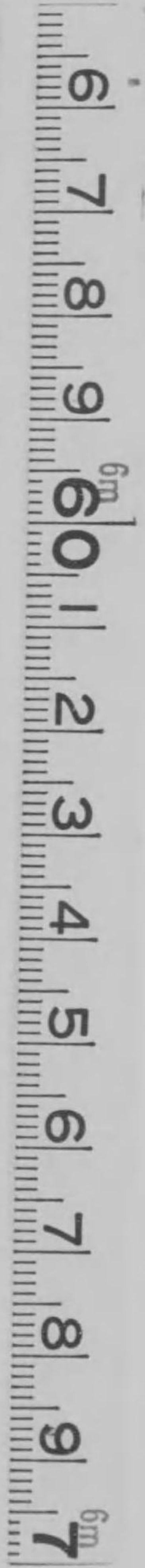


393

276

妙義之峻山巖



始



妙義火峻嶺

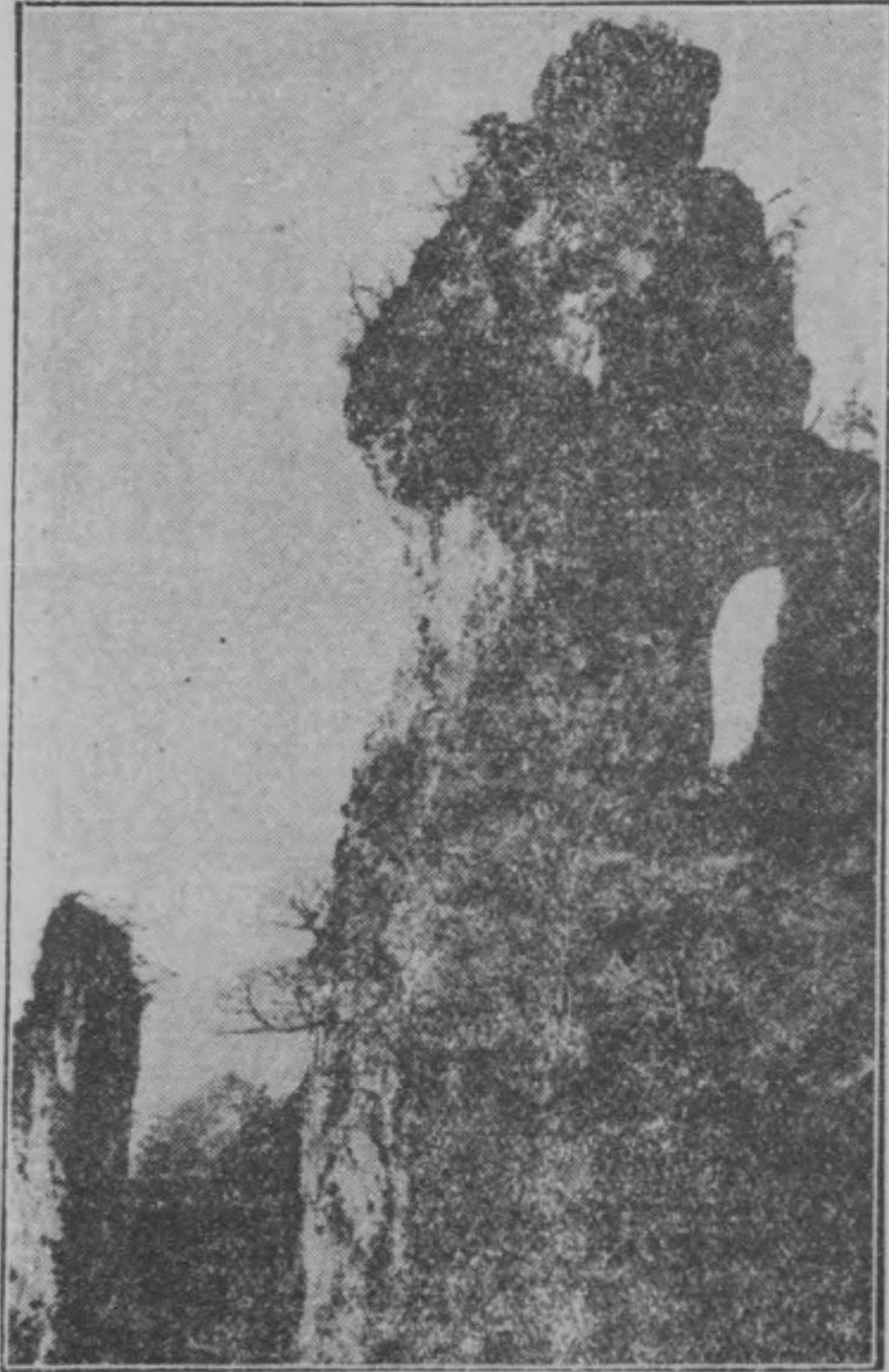
附近火遊覽地

欠

經國大典
禮部
職官
職官



妙義町全景



金洞山第二石門

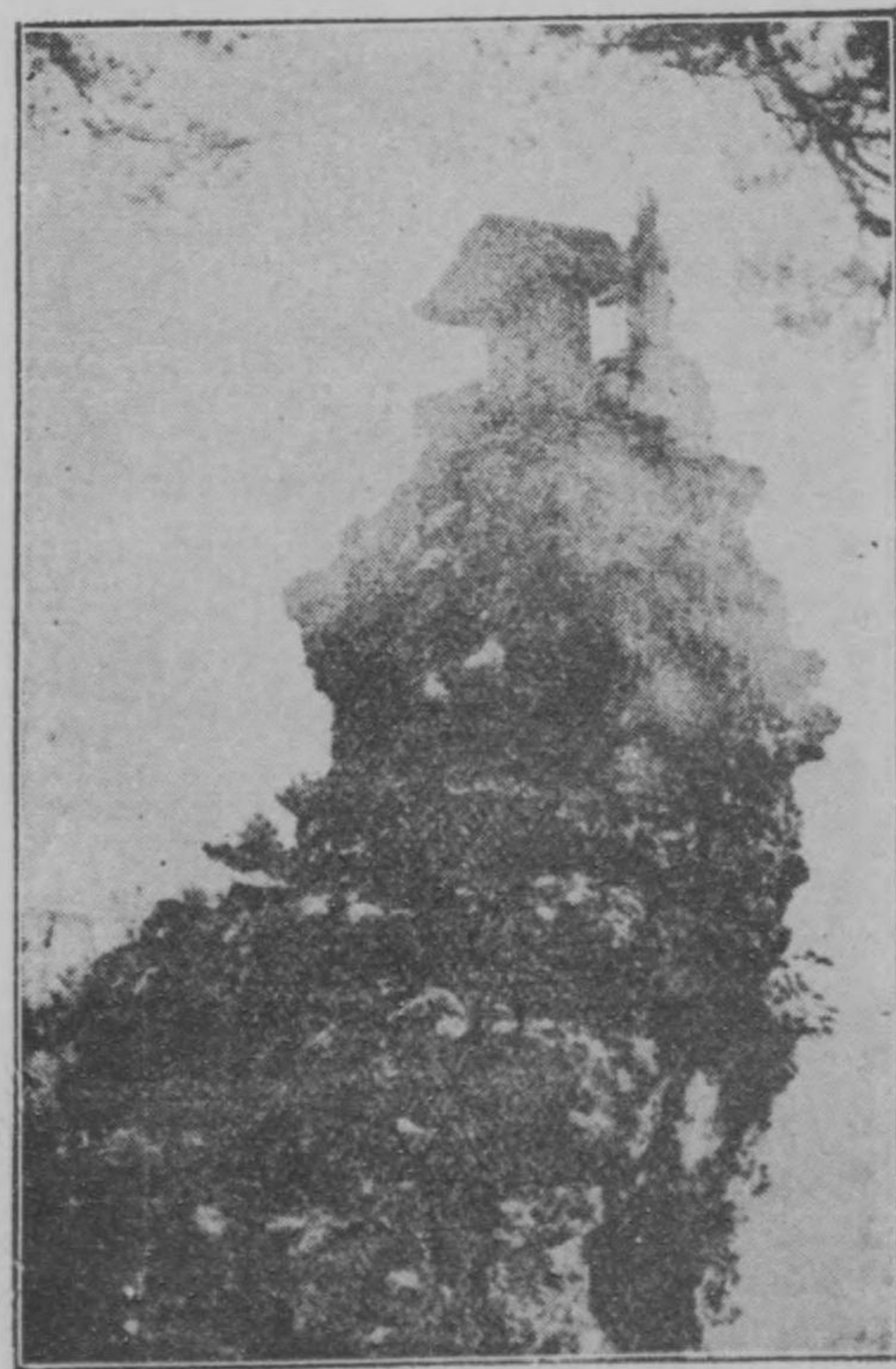


金洞山鏡岩

欠

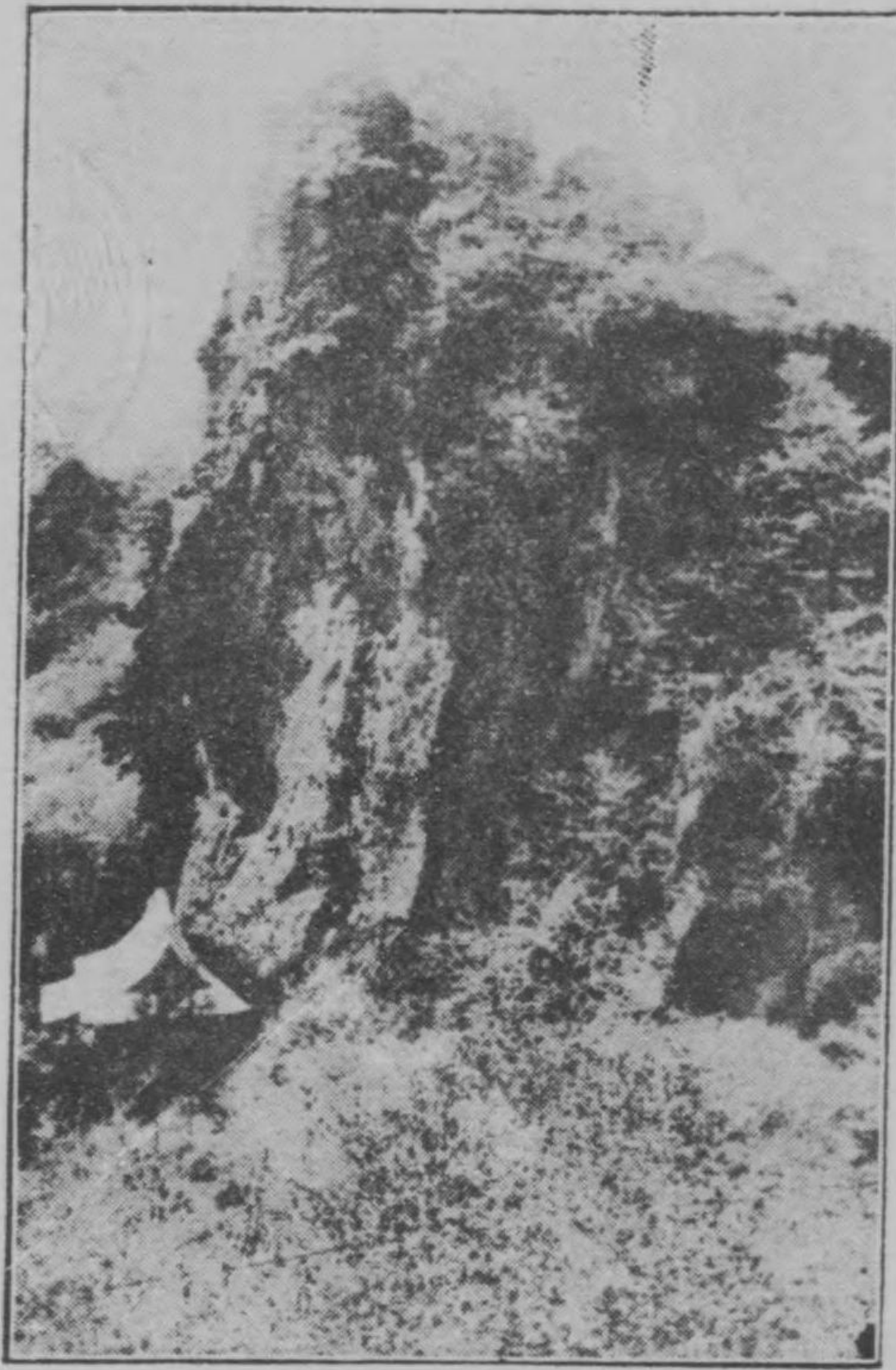


岩動及岩砲大山洞金



岩所座御山鷄金

鷄山御座所岩



面側の岳日朝山洞金



部一の場泉鑛花櫻

序

予は妙義山麓に住む一農民である、置く霜白き日鍬を肩に野に出づるの時、先目に入るものは妙義の峻峰である、一日の業を終へて家路に急ぐの時、夕餉の煙に閉されて淡き影を残すは妙義の秀嶺である、此天地自然の風光は予の慰安者である又先導者である、終日の勞苦は常に之れによりて醫せられ、日常の業務は之れによりて奮勵せられるのである、斯くの如く予は心身共終生この恩恵に浴するの偉大なるを覚え深く感謝に絶えず、こゝに於てか妙義の奇勝、金洞の絶景等汎く天下に告げ、以てこの恩澤に報いんと企圖したわけである、その後、農閑の折或は先輩諸士の高説に基き或は里老の傳に聽きて略稿を終へた次第であるが、妙義神社につきては特に當社司直井三郎氏の厚き御助力を賜はり是に初めて本書が呱呱の聲を擧ぐるに至つたので末尾ではあるが直井氏をはじめ先輩諸氏に對しこの御援助の勞を深く感謝する次第である

目次

一、總説……………一
位置及境域 成因 交通、附花月園 四季の折々
一、生物界……………四
動物 植物
一、名産……………五
一、山案内……………六
一、妙義町……………七
一、妙義山中の名勝及遊覽地……………八
白雲山 大の字 白雲山の裏山 妙義神社 菅原神社 波巴曾神社 小澤
葡萄園 一本杉金洞舎 金洞山 中之嶽神社 金鷄山 御嶽神社 鑛山

城山

一、附近の名勝及遊覽地……………二六

- 松井田 新堀 八幡宮 諏訪神社 伊勢義盛屋敷跡 碓氷峠 熊ノ平
- 碓氷神社 坂本 碓氷關跡 百合若大臣足跡岩 横野の董 磯部鑛泉
- 磯部城址 仙石碑 磯部公園 佐々木盛綱の墓 大野九郎兵衛之墓

妙義總説

◎位置及境域 高崎線より信越線に移る頃、西方遙に山頂鋸齒状を呈して削立せる峰巒を見る、之即ち妙義山にして漸次西するに従ひ山影鮮かに、磯部驛附近より既に山腹に白く「大」の字の描出するを、望み見るを得べし、妙義山は、上野國北甘樂郡の西北に起り、その北麓は碓氷郡の西南に亘れる峰巒の總稱にて、我が上毛三山中、最も西に偏し、松井田驛の西、碓氷峠の東南に在りて、北は碓氷川を隔て、鼻曲火山の餘脈に對し、西南は西牧川を隔て、荒船火山に面し西北は中木川をはさんで中木山に接し、東南は第三期層を介して大桁山に連なる臺状の火山なるも削剝作用に因りて頗る奇景を呈し、人をして一見火山たるを疑はしむ、今、中仙道より之を望めば、全山、白雲、金洞、金鶏の三峰に分れ略鼎立の姿なれども、その右なるは白雲、左なるは金鶏にして、其中間なるは即ち金洞山にて里俗之を中之嶽と呼ぶ、妙義とは白雲山の別名として呼びたるも、今は衆峰の統名たり。

妙義山の地域は二郡五ヶ町村に亘るも、上毛三山中最も狭く、僅に方二里、長經三里に過ぎず、その高距といへども四千尺に足らざれば大山高嶽と云ふ能はざるも古來名山として世に稱せら

る、所以のものは、即ちその山容の奇態異状を呈するによるなり。

◎成因 妙義山は碓氷川の西南部と西牧川の東北部との間に介在する第三期層に屬する凝灰岩と凝灰質泥板岩層の上に發育したるものにして、其山骨の火山岩よりなり、全山三峰に分れて略半圓形に灣曲せる事實より推考せば、赤城、榛名の如く其中央の窪地より噴出して成りたる一獨立火山には非ざるかの觀あれども、學者の説によれば、大術山は全く一の獨立火山なれども、妙義はその西北部より西南部に亘りて存する諸山となせる一個の火山群にして、此火山群の中央に近き處に存在する窪地は即ち舊時の噴火口なり、故に往時遠く之を望めば秀麗なる缺尖圓錐形なりしも、爆裂作用と、生成以來風雨の浸蝕作用とによりて漸次山体は削磨せられ遂に今日の奇態を呈するに至りしものにて、今の妙義山は即ちその火口壁の一部なりと云ふ、妙義山が斯の如く奇巖怪石を有するは全く之を構成する岩石の性質によるものにして、即ち板狀若くは柱狀節理を呈する輝石富士岩の熔岩と、輝石富士岩質の集塊熔岩とより成るによるなり。

◎交通 上野驛よりするも、長野よりするも、四時間餘にして松井田驛に着するを得べし、故に方今各地より清遊するもの年を追ふて増加す、磯部驛に下車せば、道程約二里半、人力車

自動車の便あり、松井田驛よりすれば一里餘、同じく人力車、自動車等の設けあり、然れども間道、即ち松井田停車場より、直に南行、碓氷川を涉れば二十餘町にして妙義町に到着し得べし、間道は秋に至れば、村民の假橋を架して、觀楓客の便を圖る、此頃ほひ客は主として此間道を経、悠悠清流を涉り岸邊、花月園の梨に渴を醫し、バナラマの如き四圍の景に見とれつ、靜かに歩を移せば何時かはや妙義の地を踏むに至る。

□附、花月園 松井田驛より妙義に至る徑路、碓氷川の南岸に在りて梨を栽培す、面積數段歩に過す北に傾斜せる砂質壤土にして梨栽培に適す、規模小なりといへども、美味を以て聞ゆその位置、高燥形勝の地を占め、背に妙義の錦繡を負ひ、放眸遮るものなく、眺望殊によろしく、遠く平野を隔て、赤城、榛名の諸嶺を望み、脚下又碓氷清流の蜩々として横たはるありて、風光眞に畫が如く、言語に絶するものあり特に中秋三五の月の空高くすめる風光の如き特筆すべき所なり、觀楓登山の砌一度必ず見舞ふべき所爲り。

◎四季の折々 妙義の地たるや、海を抜くこと一千餘米突の高處、夏にして三伏の暑なく、處によりては蚊帳の要を認めず、冬は西方一帶山を廻らし、地形東に傾くを以て、日當りよく且寒風を防ぐを以て暖かなり。

春風ゆるやかに若葉ちえ出る頃ほひ、山骨を若草が纏ふた油繪の様な景を背に、淡き緑色に包まれたる廣野の上に立てば、遠近の山々は或は青く、或は紫に、末は遠く霞のもやの海に消えて、何處からともなく開ゆス鶏犬の聲に、一層のさけさを増し、何時しか一幅の畫中の人となるを覺ゆ。

やがて葦櫻の期も過ぎて、青葉がくれにホト、ギス啼く頃となれば、緑鮮かなそが中に眞紅の躑躅散在して、切たてた斷崖に藤波の覗くも又一しほ風情あり。

桐の一葉に涼しさを興ゆれば全山紅葉して或は紅、或は黄、或は紫、或は橙と錦繡は峰より深へ、深より峰へ織なされ、其美觀他に類を見ず、老若を問はず、遠近を問はず、登山するもの引もきらず、日々數千人を下らず。

前日來の降雪やんで野も山も一面の銀世界、眞白き衣着たる妙義の岩山、高く天をついて立てるに、うらくとさしのほる朝日影の映する朝晴の雪景は如何に神々しからん。

生物界

著名のもの數種のみを左に記載す

◎動物 佛法僧 十一位鳥、ホト、ギス、ウグヒス、カケス、キツ、キ、キジ、山鳥、ハト、等の外に種々の鳴禽類多し

猿、ムササビ(一名オカツキ)モ、ンガ(一名ノブスマ)河鹿、等

◎植物 コイハザクラ、ウメバチサウ(一名バイクワサウ)

エゾスミレ(一名エイガンスミレ、又ニホヒスミレ)カタクリ(一名カタコユリ)キミカゲサウ(一名スミラン)クマガイサウ、アツモリサウ、セキコク、ウテウラン、サクラサウ、ウメガササウ、イハタバコ、フタバアフヒ、ヒメイチゲ、ダイモンジサウ、シハイスミレ、イガリサウ、エンレイサウ、マイヅルサウ、エビネラン、スマラン、フエノハナワラビ、ミヤマウラシロ、シ、ガシラ、クシヤクシダ、メウキシダ(當山特有のもの)等

名産

名産として數ふる程のものなし、桃、梨、葡萄、栗等の果物類及之等の加工品なる羊羹、果酒

等とす

山 案 内

妙義三山の山案内は妙義山案内組合なるものあり、希望者は旅館又は休憩所へ依頼すべきなり
殊に始めての登山者は山中、危険の個所多きにより、案内者を雇ふを得策とす
□附妙義町より各地への里程

- 一、白雲山大の字まで 十五町
- 一、中の岳社務所へ 一里十町
- 一、同奥の院へ 二十五町
- 一、金鶏山頂へ 二里半
- 一、同頂上へ 五十町
- 一、松井田驛へ 一里八町
- 一、小澤葡萄園へ 十五町
- (近路約二十五町)
- 一、一本杉金洞舎へ 一里
- 一、磯部鑛泉へ 二里十町
- 一、菅原天満宮へ 一里
- 一、榛名神社へ 七里
- 一、富岡町へ 三里半
- 一、伊香保へ 九里

妙 義 町

- 一、高崎市へ 六里
- 一、赤城山大洞へ 十六里
- 一、三峰山へ 二十二里
- 一、輕井澤へ 七里
- 一、前橋市へ 八里
- 一、淺間山へ 十一里餘

黒門坂を上りて行くに左側に農商務省山林局妙義森林測候所あり、その門前の木標によれば北緯三十六度十八分、東經百三十八度四十六分、海拔千四百一尺とあり、以てその位置と高さを知るに足る、現時は北甘樂郡に屬すれども本國帳に碓氷郡波己曾明神と載しもの諸戸に存する所より見れば往時は碓氷郡の管する所たりしものならん、維新前は信州善光寺への裏街道に當り一名女街道と稱す、これ碓氷の關所を過ぐる表街道に對しての名なり、當時表街道の婦人通行に八笠かりしため自然北の裏街道を妙義に本宿より信州岩村田に出たるなり、又三峰參詣の人々は妙義より吉井を経たるにより獨り妙義參詣者のみならず、通行の人々も此處に一宿せしかば大に賑ひて、戸口二百有餘、旅館十戸、妓樓十數戸もありたれど維新後妓樓廢止と及妙義神社と東叡山との關係絶えしことにより、漸次衰頽し今は僅に往來の兩側にその殘礎を

認むるのみなり、又中の嶽道の竹林の邊を禰宜町と呼ぶこれ維新前此處に御師即ち祝家のありし所なり、又黒門坂下を梨の木と云ふ、妙義町繁榮を極めし當時は此處にも町家軒を並べたりしと云ふ今に竹敷中に墓地、古井、水溜、石垣等を残す、町は妙義神社の社領に屬し町の人口に三ヶ處に門を設け、大門は即ち富岡通りにて茲に白門を建て、松井田通りの入口は今の黒門坂にて黒門を建て、信州裏街道の入口なる禰宜町には赤門を建し由なるが今は皆昔語りとなりて唯黒門坂に黒門のみその名残を止む、戸數も今は減じて三十餘戸となりしも、近年登山熱の勃興に伴ひ、四季の觀光及避暑の士人次第にその數を増殊に秋期紅葉の期に至りては觀光客の來往織るが如き盛況を見るに至れり。

妙義山中の名勝及遊覽地

◎白雲山 其の東麓に妙義神社を奉祀す、古來此峰を妙義山と呼たるも今は妙義とは三山の總稱に用ひらる、全山略三峰に分れ通俗、白雲山の絶頂と呼ぶものを鷹戻しと云ひ、最も北に位して海拔千〇八十一米ありと云ふ、その西南にありて金洞山に接する峰を相馬嶽と云ふ、此

二峰の間なるを鼓ヶ嶽と云ひ、共に急峻を極め登攀甚だ困難なり山頂の巖上に石祠を安置す、鼓ヶ嶽は一に天狗嶽とも呼び山頂最も廣く又石祠を安置す、相馬嶽は三峰中最も高く、眺望、妙義諸峰中に冠たるものなり、峰頂に祠なく、三角標點を存す、標高一千一百〇三米餘あり

◎大の字 白雲山の中腹に在り、岩石の突出したる上の平面數坪の處に岩に穴を堀三本の柱を建て竹を以て大の字形に組七五三繩を張り之に三角に疊たる御札半紙を差したるものなり、その由来 詳ならずと雖も、妙義神社はもと妙義大權現と稱したれば大權現の大の字を象りたるものにして中仙道往來の人々に大權現の所在を示したる目標ならんと云ふ、傍に石の小祠あり登るに些したる危険もなく老人、婦女子と雖もよく攀登る、妙義神社側より數十分に於て到るを得べし、眺望頗る優秀にして關東平野眼前に展開す、此處より少し上れば奥の院に到る岩窟ありて神祠を設け石神を安置す危険の個所多きにより山頂を極めんと欲せば北麓又は裏山よりするを可とす。尙本山中の奇勝を擧ぐれば左の如し

鶯の瀧、日暮の瀧、庚申の瀧とも呼ぶ、瓢箪穴、獅子岩、船岩、辨天の窟、天狗の評定場、鳩胸、大矢筈、屏風岩、犬戻し、龍立の巖窟

◎白雲山の裏山 未だ知る人少きも、亦見逃し難き場所なり、筆立岩、人形岩、十の字岩、

石割の瀧（一名出臍の瀧）鉸岩、獅子岩等の奇勝幾多の洞門ありて金洞の風致を凌ぐ趣あり
◎妙義神社 北甘樂郡妙義町、白雲山の東麓に鎮座ましまし、社格は郷社なり、祭神は日本
武尊にして岩長姫命、仁生大神、菅原神大納言長親公を配祀す社記に里老相傳へて上古
日本武尊當國に幸してわざはひを攘ひ人民を助くるの勳功最も多しのみならずいみじき奇瑞を
示し賜へるに因つて白雲山に社を建て波己曾神と稱へ奉れるなりといへるよし 宣化天皇、
二年に鎮座せりと記されたり、申すも畏れけむ日本武尊は神性武く雄々しくおはしませる故に
西東の荒ふる賊徒を悉く服従せしめ賜へり仍て其功名を傳へんとして恒に御供つかへまつり
し者に居地を賜ひ名づけて建部といふ今もさる地名諸國に多かるよし記傳に見えたり、是に就
いて思ひよれる事あり此妙義町はもと岳村といへるよし岳村は分れて今は別なり岳村の岳は武
の借字にて即ち往古の武部なるべし、ここに續きたる村落の名も亦由あるべき所ありそは大牛
村は小碓か行出は童男匠にや、また（日本記に小碓尊又名日本童男と見ゆ）また大岳村武部の
事長かはた尊の御裔なきの住みませし所ならんか、尙諸戸といへる村あり此は室田なき同じく
所謂昔の神田神戸の名殘にして即ち今の社領なれば此邊に神戸を名のるの多かるは、さる由あ
ればこそ存するなれ然れば武部といへりしことはいと廣かりけんと思はる傳へる村名とよく相

符合していかにも由縁ある所とす。
後ト野志云 妙義大権現は白雲山と云ふ、別當石塔寺、在昔は新田長樂寺の末寺なりしが、近
世に至り江戸東叡山元光院の長清法印、之を兼帯してより大に繁昌し神威も熾になりしより、
長清を當寺の中興とす長清の墳墓は當山下の坊（金洞山にもあり）に在り、名跡志云、妙義大
権現の別當本坊は白雲山高顯院石塔寺と號す堯惠の北國紀行佐野船橋の條に「西の方一筋平な
る岡あり、上に白雲山、荒船のミヤシロ」云々是妙義の物に見えし始めなり、
三代實錄貞觀云々一宮巡詣記に「上野國妙喜村法性房正面にあり波己曾神社右方にすえおきて
今は末社の如くなりまた土人の話に此の社昔は正面にありしが今は借家しておもやとらるゝ清
水の地主の如しといへり後人明魏を妙喜と誤りまた天狗となす笑ふべし」と見え
文貞公事蹟考に右大將華山院母親輝南山の皇威不振を憂へ上野國に住みたまひて明魏また耕雲
山人と號し假名反切義解耕雲に傳等を著し給ひぬ宗良親王に歌道を學びて其泳歌世に傳はれり
身退き給ひし後神と崇む今の妙義権現是なり」とあるにても知られ且社記に長親卿波己曾社を
信じたまふこと一かたならず且美德おはしければ配せ祀れるよし見えたり、さればもとは卿の
名なるが後には社をいふことになり又山の名にも所の名にもなれるなり

閑窓隨筆には花山院右近衛大將耳親雍髮して妙魏と稱ふ此の人を妙喜と誤れるなるべしと云ふ
南山巡狩録云、明德五年故の南方、後龜山院に尊號をすゝめ、大上天皇と稱し奉る其の年にや
花山院右大將長親卿も出家し給ひ、耕雲と號し給ふ、又かねて字を以て明魏とも稱せり、長親
卿は歌道を以て世に知られ給へり、永享中に勅撰ありし新續古今集に耳親卿を以て明魏法師と
書たりしを沙門契沖評して「いかに南朝につかへ給ひし人なればとて右大將まで昇り給ひし人
をかく書けることは心なき撰者かな」と云へり、三代實錄に「貞觀元年三月十六日壬午授上野
國正六位上破胡曾の太神に従五位下、元慶三年閏十月四日庚寅授上野國從五位下破胡曾太神從
五位上、同年五月二十五日戊寅授上野國正五位上破胡曾勳二等」とあり、上野國神名帳には從
二位破胡曾明神とあり此の社を妙義と云ふは明和七年小野竹叢と云ふ人温古隨筆に花山院右近
衛大將耳親卿、白雲山の邊に來り明魏と改む、後人、明魏を妙義と誤る往昔明魏と稱する所以
は明々魏々たる奇秀明媚を愛でて名づけたるものならん、上野名跡考云、妙義は尊意僧正を祀
る元享釋書に尊意、姓は丹生氏、平安城の人なり其先、應神天皇の後胤なりと見ゆ、今斯に丹
生村あり此の地に上古丹生氏の者住して其の祖先なるを以て茲に祀りしものなるべしと云ふ
以上の事項より考ふるも、中古以上のことは甚だ不明なれど、近古上野東叡山宮家の御隱居所

として皇室の御崇敬厚く、殊に東叡山御親祭の神社にして別當高顯院是心院石塔寺は御留守居
と稱へしこと、維新前上野東叡山に妙義神社を祭祀したる社殿と妙義役所のありしこと等の事
實より考ふるも、上野東叡山との關係の深かりしは、想像するに餘あり、又徳川幕府は年々玉
串を奉納し、當山より一品公辨親王の御親筆に係る「妙義大權現」と書し摺りものに、東叡山
の印を押幅として獻納する例にて、幕府は之を諸侯に頒ち與へたる由なり、尙家光將軍は神領
三十石の御朱印を寄進し、家綱將軍は、特旨を以て山林二十町八反十三歩を寄進せられしなり
斯の如く幕府の崇敬も厚く従つて衆庶の信仰は殊に深かりき社殿は往古破己曾神と稱へし頃は
式外の官社に屬し、頗る宏壯美麗なるものなりしが、中古衰微したるを建武の朝に花山院長親
公改築せられ、慶長七年、葉山左衛門、中根七藏に命じて改築せしめてより、今日の宏壯優美
なる建物となりたる由なり、又別當職高顯院の建物は東叡山の宮と御兼帶の宮殿とし且御隱居
所とせられたり、御隱居所は十二間四方八棟造りにして、極めて立派なるものなりしが、嘉永
年間祝融の殃禍を被り灰燼に歸し嘉永五年再建せしものにして、今の晨光閣これなり晨光閣は
往年北白川宮殿下の御命名にて又白雲閣とも云ひ、棟續きの社務所をも總括して里人は單に御
殿と呼ぶ

妙義神社の祭日は一月元旦、及初卯、二の卯とし、例祭は舊時は九月九日なりしを近時便宜、四月十五日及十月九日に改む、儀式としては往古は兩部神道にして東叡山の宮御親祭なりしを以て種々の儀式あるも、今は神社祭式により、儀式なし

□妙義神社の什寶を擧ぐれば左の如し

一 貞宮殿下御下賜品三点、明治三十一年夏、宮様御殿御滞在の砌の御玩具にして東都へ御還啓の折の御下賜品なり、名工の作

一品公遵親土御直筆額 一面

一品公辨親土御直筆額 一面

共に奉納年月不詳

神祇伯資訓王御直筆額 一面

明治元年十一月八日奉額現時本社正面に掲ぐ

照高院宮御詠筆和歌掛物 一幅

青蓮院宮御染筆東照宮御名號掛物 一幅

百合若大臣の弓及矢 弓長八尺矢長四尺五寸 共に銅鐵製

一、八大龍土の鈴 尊意僧正の所持品にして往古より秘藏のもの

一、鈴、傳に云ふ 傳教大師の所持したるものにして支那より傳はりしもの

一、獨鈷、傳に曰、傳教大師の所持品、金銀張り分け名工の作なりと

一、山院寺号、二品良尙親土の筆

一、藥師の名号、一品公辨親土筆

一、鳳凰の羽、大鳥の卵、馴鹿の角、河馬の牙

以上四点は傳來由緒不詳、上野東叡山の宮の御寄進

一、和歌の色紙 聖護宮御筆

一、白雲山の圖 狩野右京時信の筆

一、觀首の像 探幽齋の筆

一、山水壽老人の圖 狩野探幽の筆

一、木の實の念珠 印度菩提樹の實にて作り、法性辰の所持のもの

一、白雲山の詩 黃檗湖音の書

一、紺紙金泥 船若心經、弘法大師御染筆

一、古代の石劔 傳に曰、日本武尊の御愛品にして破胡曾の太神の本殿に往古よりありしものにて一時妙義神社の御神體となせしことありと云ふ

一、鈴 傳に曰、傳教大師の所持したるものにて、支那より來れるものなりといふ鈴虫の鈴と云ひ妙音あり

一、二王の像 二王門の雛形にして運慶の作なりと云ふ

一、五色の寶珠

一、白雲山の詩 梶井宮盛胤親王の筆

一、妙義ノ權現 一品公辨親王筆

一、紺地金泥心經 傳に曰く、慈惠大師の筆

一、不動尊の像 傳に曰く巨勢金岡の筆

一、心經 僧空海の筆

一、曼荼羅 筆者傳來不詳、五百年前のものなりといふ

一、梟の圖 徳川家綱將軍の筆

一、地藏緣起の圖 土佐將監光信の筆

一、觀音の像 常信の筆

一、瀟湘八景の圖 狩野永眞の筆

一、觀音龍虎の圖 宮崎重政の筆

一、裝飾の太刀 磯部大手萬平氏の寄進せるものなり

◎神苑 總坪六二三九八坪甚だ廣濶にして、老杉、鬱蒼として繁り高く雲表に聳え金碧朱楹の妙匠を隠見す、盛夏酷暑の候と雖も、此處にありては肌自ら粟を生ず、古くより、皇族、朝野名士の來遊せるもの多く、殿下御手植の樹木、名士の献木、寄進せる燈籠等、其數多く、何れも皆神苑の中に在り、又兒島高德の献詠碑及燈籠あり「こゝろさし立る願を〇〇なびく此の白雲の山にいのらん」の和歌を刻す、碑面青苔に隠れ且缺字あれば四五字讀みがたし、もし三句は「うち」にはあらぬかと

一等侍補 佐々木高行

踏みわけて入らむよしなき身なれとも山のゆかしき峯の白雲

かく人の筆を巧みと思ひしは此山水を知らぬなりけり

●菅原神社 俗に天神様と云ふ妙義町菅原、金鷄山の東麓に在り、村社にして菅原道真公を祀る天曆四年の創建にして年々三月二十五日を例祭日となす、社傳に曰く、菅公二十五歳の時自ら二十五歳の像を彫刻し、一体は河内國道明寺に納め、七歳像の一体は上野國天沼の里に送らる、今の神体之なり、天曆四年二月、天沼の里を名づけて菅原村と稱へ、一寺を建立せり、即ち天沼山菅應寺是なりしが明治元年廢寺となる、

●波己曾神 今妙義山の下諸戸に在り、方俗相傳へて妙喜權現祠の地主神と爲す、名跡志曰、諸戸村に今波胡蘇明神あり、之れは三代實錄に一貞觀元年授上野國正六位上波己曾神とあり、上野國神名帳「碓氷郡の中に從二位波己曾明神」と見え給へり古は此あたりも碓氷郡にてやありけん、今は額に正一位波胡蘇大明神（石の華表の石額には波己曾神とあり）と見ゆ、いつの頃、文字を書かへけるにや、かくしばく神位も進み玉へるに、いかで延喜の神名

式にはもれ給ひけむ、古語拾遺に「至天平年中、勅造神帳、中臣更權、任意取捨、有田者小祀列、既縁者大社猶廢」といふをも見侍れば延喜の御時とさることなきにて載玉はざるにはあらぬか、神祇志料云「波己曾神は今日雲山に在り、故に白雲山神社と云ひ又武尊權現とも申す傳へ云ふ妙義權現地主神なり」と「神社の傍に御菲島とて菲のみ生ずる所あり、此物は神の甚しく憂ひ給ふ故に手に觸る、もの忽ちに罰を受く」と此説いと鄙びたるが如く聞ゆれど日本武尊の菲を白鹿に擲ちてその過を免かれ給へる故事に出しなるべし武尊の神とは當國にて所々に祭る、中にも利根郡保高山に在るを根本に推さる

●小澤葡萄酒 妙義より中之嶽に至る途に在り、小澤氏の經營にかゝる、葡萄、梨、桃、梅等の果樹を栽培す、茶店の設けありて、名産羊羹、果酒を製造販賣す金洞登山者の休憩所たり
●一本杉金洞舎 大公園金洞山大部分の所有者たる柴垣氏、此處に居宅を構へて金洞舎と呼ぶ、小澤葡萄酒園より流汗淋漓急坂を登れば、一本杉見晴らし金洞舎に至る、露臺に腰うちかければ、小娘の茶を吸み來るあり、此處に於て眞に茶の味を知る流茶にのきをうるほし汗を拭ひて亭によれば、眺望絶佳、流れは細く、長く、白くして、蛇の横たはるが如し、森や民家の三々五々と點在する様は恰も碧空の星を見るが如し、近くは榛名、赤城の諸山より遠くは常陸筑

波山に至るまで皆一眸の中に集まる、こゝより約十町にして武尊の祠に至る、山勢の奇秀なる漸次此邊より加はる

◎金洞山 妙義の中岳にして山勢の最も奇秀なる所なり、妙義白雲山の名は稍中世より起れども金洞の名はさのみ久しからず蓋妙義白雲の名を以て諸峰を兼括し、金洞金鶏の名を分つに及ばざりし也澤氏曰く、道士長清金洞を開くは百年前に在りと即ち元祿中の事となす、而も山峰の神異近世の諸遊客金洞を推し其第一とす、

上信日記云、金洞は中之嶽と稱へらる麓より登り十町許に人憩はす草屋あり、又上るに怪しき岩もこゝろ立てり天柱峰、天燭峰、筆頭峰など云ふ、又三十町ばかり上れば第一の門に到る見上ぐれば廣さ凡そ十餘間門の姿にして山なり、山の形にして自然の嶽なり亦北の門を通りぬけて五六町行きて武尊權現の社に到りぬ大黒天の御堂きら／＼し又二町ばかり登りて三嶽の橋と名づけし岩の上をわたる、大岩のめぐりをめぐりて鬼のひけすりと云ふ岩のもこに出大岩の二つならびたる間、七八寸もあきたらんと思ふ間を二丈ばかりのほりてその岩の上に出こゝに立る巖は大日尊に似たり、さて大日嶽といふこゝより鬼面石、大黒岩、地藏岩などよく見ゆ何れも四五丈ばかりありぬべし、さて武尊の御社に下り又案内する人をやとひて、東の嶺にわけ

入に足のたつもとどなし、かしろの上に生ひかりたる木の枝をこらへてつたひ下るに一足もふみたがへば千尋の谷に落ち入なましと心もきゆるこゝ幾たびと云ふこゝなし、第二の門に到る一の門にくらぶれば、三つが一つの大ききなり近くより見て又もこの道へかへる、又たに二つ越ゆれば第三の石門に至る、これも同じ大ききなり、又わけ／＼して四の門に至る廣きこゝ一の門に倍せり、このあたり實にこの世の境と見ゆ、我が身、いつの間にも仙人に身をかへけんと思はる、大黒岩自然の形の誠に入の手を借て削り作りたらんやうなり高さ十餘丈あるべし、其外鬼の閻、天狗岩、地藏岩、血池谷などまことさること、思はる、予ひまをぬすみて近き國々をば經めぐり見しこゝたび／＼なれどかゝる山の景はいまだ見ず碓氷坂、堀切坂、くりから坂入相の瀧なごはるかに見ゆわけ／＼して妙義山に出ぬ云々

竹堂遊記云、凡そ山に貴ぶ所の者肉にあらずして骨に在り肉豊なりと雖も凡そ山たるを免かれ骨多し故に石壁峭拔奇態横生是金洞の勝天下に冠たる所以なり今砥澤より下仁田を經東北溪に流る榛棘葬々として人を没し天將に暮れんとす金洞を望むに唯秀崖千仞雲表に縹緲たる而已夜岩高寺に投じて宿す寺は山腹に在り堆嵐疊綠、人の衣枕を壓し夢魂も亦冷なり次日寺後より級を躋り武尊の祠に謁す洞あり金洞窟と云ふ洞外は絶壁空に徹す長清道士の碑を置く道士は

開山の祖たり事載て碑中に在り愈登る石背欹側し半圮橋の如し之を渡れば巨石倚疊折裂合せ
す縫衣の綻びたる若く腹石に貼して而して其背に出鬢眉皆摩す、之を摩鬢岩と曰ふ、大日峰そ
の上に在り、眺望頗る豁、金剛峰と云ひ彌陀嶽と曰ふ、蓋々臚列して排戰聯甲の如し、天狗岡
と云ひ鬼面岩と云ふ、奇醜争ひ出高僧誦呪、百鬼蹲伏するが如し、天燭峰と曰ふ、卓立綠燭の
如し、天柱岩といふ空を刺し柱梁に類す餘峰頂に座す、四山の勝威萃る猫將軍車上に坐し而し
て三軍の兵士環向して命を聴くが如き也、兩峰の觀既に終る乃東峰に登る石門巍立數十丈なる
を見る、是第一門と名す門内より過ぐ亂崖、攢簇小祠あり、既にして第二門を得たり、形偏倚
半彎の明月の如し、第三門は甚だ高からず而して廣さ數人を入、第四門は洞然豁大數間の屋の
如し、門外は絶壁に望み俯して視るに底無し、奇崖之を透り或は欹、或は直、或は俯、或は仰
梯の如く、飛橋の如く挺芝餅笥の如く詭態異狀應接之が爲に暇あらず、自飛翔の鳥奔逸の揉と
なり絶嶽窮谷、一時偏く到らざるを恨む耳、風方に至り搖り落ちんと欲す、乃ち下る、里餘妙
義祠を得たり噫金洞の山たる甚だ大なるにはあらず、而して秀削絶特、寸崖卷石と雖も皆平凡
に超絶す譬ば猶高士名流の皮膚毛孔一點塵俗の氣無きが如き也、天下の山其誰か此に媿づる無
き焉、

金洞山中名勝を擧ぐれば左の如し

大石門 第一石門 穴の高さ十丈、巾八尺 第二石門 穴の高さ四丈、巾一丈五尺

第三石門 穴の高八尺、巾一丈二尺、 第四石門 穴の高八丈、巾九丈三尺

第五星穴 穴の高十丈、巾九尺 第六射貫穴 穴の高五丈、巾二丈

小石門 東胎内の穴、女婦岩の穴 蜂室の穴 鳥越の穴

動搖岩の穴 鼓岩の穴 科戸の穴 阿波岩の穴 西胎内の穴

東部の奇巖及勝地

東仙人窟 奥二丈經 丈二尺、並窟屋入口より出口まで七間

古屋詰崖 大小二ヶ所、東三狭橋、蟻の戸渡り、鷺の岩

大蠟燭岩 龜岩、筆頭岩、御花島、虎岩、東大黒岩

天狗臺 夜見の岩、大砲岩、動搖岩、身曾貴岩、觀物峯、菅公硯水窟、御鏡岩

西部奇峯勝景

金洞巖(金洞窟)奥八尺經一丈、西大黒岩、鬚摺岩、二見岩、西三峽橋、烏帽子岩

阿波の岩、八丈ヶ岩窟、朝日嶽(高二百八十尺)轟岩、鞍掛岩、九曲岩、玉綾の瀧

●中之嶽神社 金洞山嶺中の所謂中之岳の麓に祀り今は小坂村の村社に屬す祭神は前官に大國主命奥宮に日本武尊を奉祀す例祭は初子祭を一月初子日に養意祭を四月廿五日に大祭は十一月十五日に行ふ古老の傳によれば上古日本武尊御東征の砌、此山の妖賊を退治せられしかば後村民等その垂跡を慕ひまつりて小祠を建たるに創まり其後嵯峨帝の御代弘法大師登山して大國主命を齊きまつる壽永年間、藤原祐胤創めて祠堂を建立せり後綴田信長の時、北條氏の臣加藤長清此山に來り終業せしを本郡小幡城主綴田筑前守深く之に歸依して戰國擾亂の際に尙廢頽せる堂宇を再興せり、後松平攝津守の封を此地に移すや當山を祈願所として巨額の資を投じて壯嚴なる殿堂を建築せしかぎ文久三年火災にかゝり全部灰燼に歸し當時天を摩して露蒼たりし老松古杉皆枯れたりといふその後領主の出資によりて再建せられたるも明治十五年三月荒船山に興りたる山火災は烈風に乗じて飛火し當山亦烏有に歸せり、現今の祠堂は後社掌工藤氏の經營に成れるものなるが出資者なき今日なれば今は昔の面影もなき有様なり、當山に弘法大師の奉齋せる大國主命所謂大黒天の木像は其後幾度か改造せられし由なるがその御影は最初と變りなく右手に利劍を持する奇形なるものなり本社奥宮の傍に長清道士の碑と墳墓あり八丈が

窟は道士の穴居の跡なりと傳ふ又道士は齡百四十八歳を保てりと云ふ。

●金鶴山 金洞の東、南北に狭く、東西に長くわたれる山嶺の稱にして山骨は白雲金洞と同じく熔岩と集塊熔岩とよりなる最高點は僅に海拔八百九十一米に過ぎず、全形、鶏の頭冠に似たるを以て此名あり、山中筆頭山、子持岩、御嶽、樋等の奇勝あり、就中樋は金鶏山東端御嶽の奥宮に至る間にあり、左右斷崖絶壁、馬の脊の如く而も峻嶮にして岩瘤にたよりて登る者、一たび足すべらせば千仞の谷底に落つ、登る者其危険なるに恐れて腋下に汗す山中の奇巖勝景を擧ぐれば左の如し。

筆頭山（天燭峯）子持岩、挾岩、劔ヶ峰、氷室ヶ岳風穴、帆立岩、蟹の四道、乾瀧、馬の脊渡り、親不知、鞍またぎ、頬摺り、山狭の橋、髭摺岩、

●御嶽神社 金鶏の東麓に在り、大字菅原に屬す、近年拜殿社務所等を里に移したれば唯社殿のみを存す。

●鑛山 金鶏の東端の山腹に在り、僅少の黄銅鑛を産す金色を呈するにより古人は金と思ひて採屈せしが今は廢鑛となりて其跡を存するのみ。

◎城山 金鷄山の東端に在り里老傳へて高田氏の城址なりと云ふ。

附近の名勝及遊覽地

◎松井田 今新堀村を併せ松井田町と云ふ、人口約五千、鐵道は町の南を過ぐ、中仙道驛次安中と坂本の間とす、太平記中、先代峰起の條に安中松枝の驛名見ゆ、名跡志云、松井田又松枝と書し一驛也、平治物語に「義經上野國松井田といふ所に一宿して家主の男を見るに、大剛のものに見ゆれば主従の約をなす、伊勢の國のものなり、伊勢三郎義盛と名のる」云々曾我物語に頼朝卿其夜は松井田に宿り給ふ」又「上野國松井田三百町愛甲三郎に給ふ」なき載たり、前上野志に松井田に學校の跡あり、承和二年小野篁之を建たりと傳ふ、今の貞松山崇徳寺が之なりと而し其小野氏の建學といふこと疑はし、上野國學生科稻一万束とも載すれば此地に學校ありしも知るべからず。

◎新堀 今松井田町の管内なれど西に離る、松井田停車場の所在地なり、松井田城址あり新堀の名は即ち城壕に起れるものとす、名跡志云武田三代記松井田の城主安中越前守は嫡子左近の練をも許容せず籠城す、永祿六年二月廿六日武田信玄六頭を差向けて攻むるによく防戦打つ

て出ること三度終に叶はず降る云々、松井田城は新堀に在り武田没落後天正十年七月より小田原持となりて大道寺駿河守政繁居住、同十八年五月四日落城、城主切腹、息新四郎降参、此時城破却せらる、甲陽軍鑑云永祿六年松枝の安中越前守押詰められ降参すと雖も早く佗びざる故御成敗、城代には小宮山丹後を指置かる管窺武鑑云、天正十年信玄公より上野を瀧川一益に下さる其後六月一益は上洛前に小田原へ當り一軍仕懸くべしと武藏國へ打つて出、松井田の城には人質を預け同苗彦次郎を差置く大道寺駿河守の墳墓は補陀寺境内に在り、碑面に「爽炫院殿光月淨大居士」の法名を記し碑陰に碑文を刻す、

◎八幡宮 松井田町中央の北側に鎮座します、譽田別命、神功皇后玉依姫神を祀る創建年月不詳、建久年間頼朝公淺間三原野卷狩の際當社に休息せられしと傳ふ、

◎諏訪神社 新堀に鎮座永正七年諏訪但馬守當所居住の際信州諏訪明神を勸請したるものと傳ふ、建御名方神、八坂刀賣神を祀る、當社西方澤中に神足石と呼ぶ奇石あり、建御名方神の遺跡なりと傳ふ、

◎伊勢義盛屋敷跡 松井田町舊泉福寺の在りし處は義盛の父神來義連の居住したる所と里人之を傳ふ、

●碓氷峠 群馬長野の國境に當る峻嶺にして夙に紅葉を以て聞ゆ、山路は坂本驛より起り新
舊二道あり新道は南に鐵道信越線に沿ふて走り舊道は新道の北部を廻りて峠町權現祠を經るも
ので曲折回轉登路甚だ困難なり、新道は明治十一年、聖上北國御巡幸の砌、之を改修尙十六年
更に改修せらる鐵道は同廿六年山路七哩の間、廿六個の隧道を穿ち、ラックレールを敷設（軌
道公配平均十五分の一）シアプト式機關車を運轉して運輸交通の便を圖るに到る而るに今や横
川に火力發電所を設けて之に代ふるに電氣機關車を用ふるに到れり、

●熊の平 碓氷嶺中の一車驛なり觀楓の季節には乗降客織るが如し、

●碓氷神社 縣社にして碓氷嶺頂、舊道峠町に有、俗に權現と云ひ熊野神を祀る中央に伊邪
那美命東に速玉男命西は事解男命を祀る、東の社殿は群馬縣に在り、西は長野縣に屬す、華表
石燈籠、隨神門等皆兩縣に跨る神樂殿は明治十一年聖上北陸御巡狩の時、駐籠所に充てさせら
る、境内に日本武尊が橘姫を歎ぜさせ給ひたる遺蹟に尊を祀り若宮日本武神社に號す、碓氷
貞光の塚は神社の北方貞光林中に在り、

●坂本 坂本宿、原、峠町、入山、北野牧を併せて坂本と云ふ宿は即ち古驛の址にして昔は
箱根の小田原に於るが如く上下の人馬停留の地にして人馬喧囂、諸侯兇槍の影一日も絶ゆるこ

となく、旅亭甚だ壯大に娼家列りて頗る賑ひたるも鐵道の開通と廢娼とによりて近年全く荒涼
の山村に變ぜり、横川驛の西南一里、入山は妙義の西に當り、溪山の奇勝頗る賞すべきものあ
るも碓氷妙義の近く之を壓するあれば人に顧みられず、又坂本の西北に霧積温泉あり火傷等に
効ありと云、

●碓氷關址 白井町大字横川の西端に在り、木曾路圖會に云横川には看街樓あり、碓氷の御
關所と云ふ、女切手、鐵砲の御改め（俗に出女入鐵砲と云ふ）あり、大日本地名辭書に云、按
横川、峠町兩所の碓氷關は近世安中藩之を守り、中仙道の要塞と爲せり、是専ら江戸幕府の時
なるが古代にも碓氷關あり已に將軍記に「軍攻者足柄、碓氷、固二關、當禦坂東」と載せ、三
代格には「相摸國、足柄坂、上野國碓氷坂、置關、勘過の昌泰二年官符を収めたり、其の關柵
は、此の山中街地なりしにや、興廢の沿革詳ならずとあり」此關所新設年代は不明なれども徳
川氏が此地東海道箱根と並立して關門要害の場處として守らしめたるは事實なり、
五料、横川、松井田間の村里なり、御料の義にして中世の田制名目に出るもの、如し
●百合若大臣足跡岩 木曾路圖會云、坂本宿より松井田まで二里半其道の側に百合若大臣の
足跡石あり、又射貫岩とて峰に岩穴見ゆるなり貝原益軒の曰く、百合若大臣と云ふ人古書にも

見えず、日本武尊を誤りてかく云ふ歟、豊後筑前にも百合若の故跡あり世の傳へには嵯峨帝の御宇、四條左大臣公光の子百合若大臣、九州の惣司として下向云々、蜀山人、壬戌紀行云坂本驛を出又人家あり原村といふ、薬師坂を下り川久保橋をわたりて横川の關あり村を過て左に社二つあり山の岨を左にし川を右にし行くに川の向ひに黒き岩山二つばかり峙あり坂を下りて左の岨に足の腫の形してくほく穿てる石あり、俗に百合若大臣の足跡石と云ふ、右のさかしき岩山に穴二つあり、西なるは大に東なるは小さしこれは射ぬけ山とて百合若の射ぬきし跡（百合若の用ひし鐵製の弓矢は今妙義神社に奉納し有り）なき輿かくものゝかたるもおかし明月峽のたぐひなるべし、天和年中撰江戸雜記紫の一本云、大多橋は大多ほつちがかけたる橋の由傳ふ四谷新町の先笹塚の手前なり肥後國八代郡の内に百合若塚あり塚の上に大木あり百合若は賤しきものなり大臣と云ふは大人なり大太と云ふ、大人にて大力ありて強弓をひきよく礮を打つ今大太ほつちと云ふは百合若のこほつちとは礮のことなりとぞ一とせ大風にて右の塚の上の大木たふれて崩れたる中からうとあり、内を見るに常の人の首四へ五つ合せたるほどの首あり不思議なりと見るうちに雪霜の如く消失せぬ、依つて大なる卒都婆をたて右の様子をかきつけて塚の上にてたてる其卒都婆今にありとぞ、百合若は筑紫の人にて玄海ヶ島に於て鬼を平ぐる

こと百合若の舞に見えたり然るに奥州の島の中に百合若島と云ふありて見たり丸と云ふ鷹の事まで礎にある島ありとぞ又上州妙義山の道にも百合若の足跡矢の跡とてあり此外にも大太ほつちが足跡、力業の跡爰かしこに在り。

◎横野の董 碓氷甘樂の郡界東西四里に涉れる山野を横野原と云ふ後上野志に眞光寺原一名人見原を横野と云ふ妙義の麓なりと古來ヨシレ花、董の名所として傳へらる名跡志曰横野は入雲御抄と見えて上野國の名所と注せらる行囊抄には佐波郡玉村の邊を横野となし玉の横野と稱ふ此と別地也と

山 家 集 西 行

董咲く横野のつばな生れぬれば思ひくくに人通ふなり

◎碓部鑛泉 碓氷郡碓部村の西方西上碓部にあり信越線碓部停車場を距る西北約二町運輸交通共に頗る便利なる處なり鑛泉は鹽の窪に湧出し泉源二ヶ所あり一はその發見年月不詳なれど

も東鑑に記載しあるより見るも往古より存在せるを疑ひなし他泉は弘化四年信州地震の際の湧出とも傳へ或は天明三年淺間山噴出の時始めて湧出したのとも云ふ、本泉の治病に偉大なる効あることは年已に久しく泉質は炭酸泉にして温度攝氏十六度六なり明治十七年中仙道鐵道布設の擧ありて以來日に月に榮え貴顯紳士の別荘を始め旅館、茶亭、商家、擔を連ねて今日の繁盛を見るに到れり

産物としては「ラヂウム」鑛泉湯の花、磯部鑛泉サイダー、齒磨き粉原料、磯部煉瓦、鑛泉應用菓子類等とす

●磯部城址 俗に城山と云ひ停車場より東南數町にある小丘なり佐々木高綱の兄盛綱の築く所と云ふ高さ十有餘丈周圍七八町許頂きは平坦にして樹木繁茂すその舊跡として見るべきも二三石垣の存するのみ明治廿一年地方有志相謀りて公園となし山下に櫻樹を植う、春は櫻花爛漫として綻び秋は滿山悉く紅葉して錦千段を織成すの壯觀を呈す、東鑑に盛綱と磯部との關係見ゆ新葉集に讀人知らずとして一首

山路よりいそへの里にけふはきて

うらめつらしきたひ衣哉

●仙石碑 藥師堂の上に在り小學上野志に磯部村大字西上磯部村の北字鹽の久保に仙石因幡守久俊の碑あり、此地も其封邑也、地灌漑の利なく唯僅に雨水の澤によりて耕雲をなすことを得るのみ、若夫雨なくんば早魃忽ち到り野に青草なきを例とす久俊之を思ひ寛文中碓氷川を引て田用水となし民をして其澤に浴せしめんことを請ひ其允許を受け、溝渠長さ一千五百餘間を穿つ是より後水旱の患ひなし民歡呼して曰く、河水東流して庶種荐りに登り、永く當年艱阻の患ひを免かれしめたるは一に公の賜なりと即ち嘉永五年爲に廟を建て其功績を石に勒せりと。

●磯部公園 停車場より約二町園内に村社赤城神社鎮座す社域には老杉繁茂し周圍に櫻樹躑躅等を植ふ、西北は碓氷の清流に望み鑛泉地を眼下に遠く妙義の淡影淺間の噴煙を見る此地舊井上伯の別邸たりし處なるが後原市の人半田善四郎氏の所有に歸せしを當地の有志謀りて借地し明治四十年公園となし花木を補植し石を置きベンチ、亭を設けて浴客の逍遙に便にす一度園中の人とならんか櫻綻ぶ陽春の頃に到れば園内皆花に埋もれて老若男女織るが如く花吹雪に送らるる三味の音には何時か心もうき立ちて手の舞足の踏む所を知らず、風に藤波さはく頃、赤城公園の躑躅は新緑中に眞紅の波を漂はせ遠近人の杖を引くもの數知れず花の下碓氷の斷崖に

坐せば清き流れは足の下に鑛泉地は淡き葉櫻の中に見えがくれ西にはかすめる空にうす紫に染なされたる妙義山その右の端には藍色に彩る淺間の高くほの白う煙を吐くも見ゆ清風徐に來りてうた、仙境に在るの想ひあらしむ

●佐々木盛綱之墓 鑛泉地の東方約十町磯明山松岸寺と呼ぶ寺あり墓はこの堂宇の左側に在り、明治廿年元老院議員黒田清綱氏傍に一碑を建て次の一首を刻す

題佐々木盛綱古墳 正三位源清綱

ありし世のほまれと共に不朽してしるしの石の残りけるか南

盛綱は近江の人佐々木秀義の三男なり當地に居りしこと東鑑に明かなるも大日本史に盛綱晩年に願蓮房と稱し越前福井に眞宗寺を建て住せし由、記しあればこの地に墳墓のあるは稍疑はしきも武家系圖に子孫尙當地に住したる由記載しあれば蓋その歿後子孫の此處に建たるものなるやも知れず

●大野九郎兵衛之墓 松岸寺内別に在り九郎兵衛は播州赤穂の臣なりしが主家歿落後當地に來り手習ひ師匠となり後入道して遊謙と號し當所にて歿したりと傳ふ、眞偽詳ならず。

皇族殿下貴
紳高等官其
他の御投宿
不絶有之年
々御客數増
加仕候

一 等 旅 館

文化元年創業
妙義山突當り左側角
養氣館

ひし屋傳平

松井田停車場前ニ支店ノ設アリ弊館ハ眺望無比、寢具清潔懇切丁寧ヲ旨トス
山案内人差出申候

本館ハ妙義山町ノ高地
 ニ有之四季ノ眺望ハ曩
 ニ大附桂月先生關東隨
 一ト激賞有之候何卒御
 登山ノ節ハ御投宿アラ
 ンニトキ奉希上候

上州妙義山三王門前

中之嶽入口

御休泊

旅館

東雲館

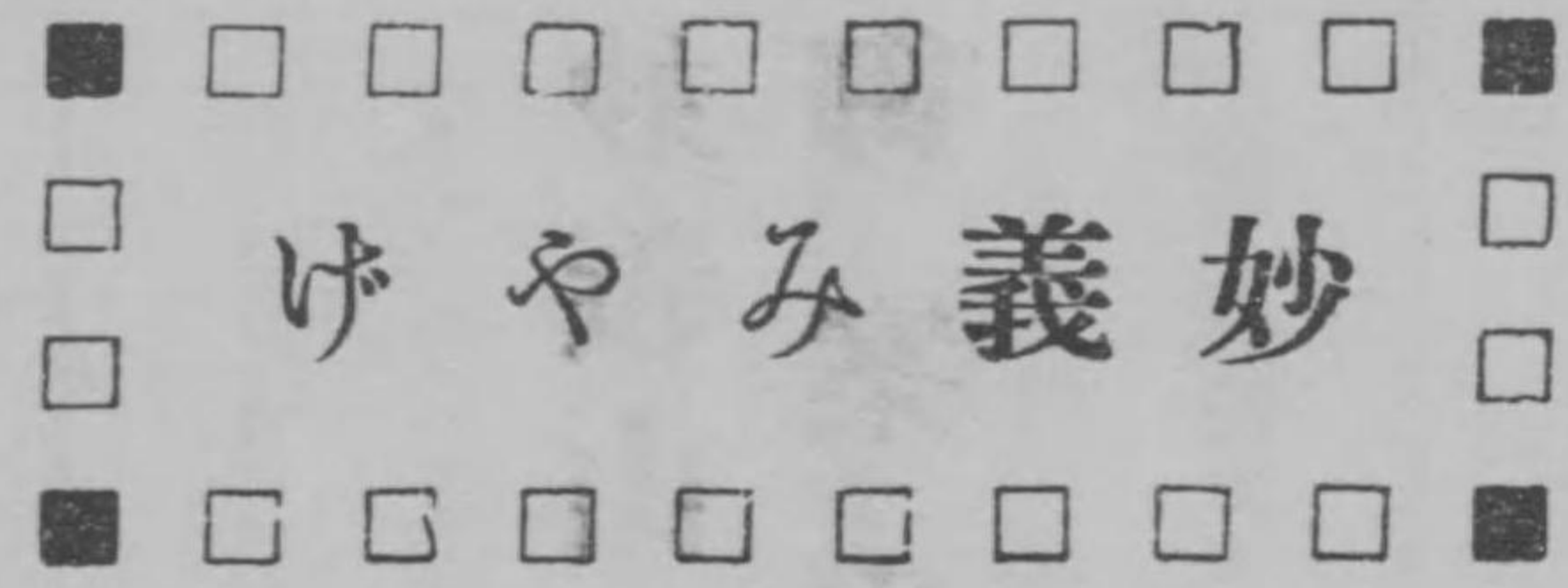
中之嶽石門御案内所

妙義山名勝
 御案内所

上州妙義町

新舊兩道之交又点

玉屋旅館



妙義のみや

元祖

金鶏印純粹葡萄酒
 葡萄 ようかん
 梅 ようかん
 栗 ようかん

上州妙義山中之嶽中央

製造元 御休憩所 小澤葡萄園

御休憩所
 繪葉書發行所

中之嶽一本杉

金洞舎

例祭四月初子日
太々御神樂執行

中之嶽神社

御休
憩所

社務所

繪葉書圖發賣元

上州松井田町四ツ角東一町

勉強
旅館

酢屋徳七郎

電話二一〇番

上州松井田町

港屋

勉強
旅館

明星館

坪井あい

電話一六番

妙・義・登山客

御定宿所
御休憩所

松井田驛より約五町
園内に火見櫓あり

上州松井田停車場前

妙義榛名
御案内所

油屋旅館

電話一九番

磯部製菓合資會社

製造部

上州磯部鑛泉地

大手商店

沼賀兄弟商會

鶴林堂

鈴木堂

上州磯部鑛泉地

旅館 鳳來館

旅館 磯部館

旅館 林屋館

旅館 長壽館

旅館 旭館

旅館(御料理) 信泉亭

旅館 末廣館

旅館 磯の屋

旅館(御料理) 興盛館

旅館(御料理) 樂亭

料理店 公園亭

料理店 昇月

梨

碓氷川の南岸
松井田驛より
妙義への間道側

花

月

園

ながめ

は

一しほ

味は

かくべつ

393
276

上州妙義山麓行田妙義街道北側

梨 大正園 園主 寺島琴治郎

同山同街道南側

梨 八千代園 園主 寺島政五郎

上州妙義山麓行田

梨 明正園 園主 寺島朝吉

大正十年十月卅一日印刷
大正十年十一月一日發行

定價金三十錢

編者 寺島平三郎
兼 發行人

群馬縣碓氷郡西橫野村大字行田九三三番地

印刷者 川合鐵太郎

群馬縣前橋市北曲輪町七十八番地

印刷所 上毛印刷株式會社

群馬縣碓氷郡西橫野村大字行田九三三番地

發行所 妙義之峻嶺社

393
276

終

